かがやく笑顔

山梨県立やまびこ支援学校
相談支援部通信
令和３年３月１５日発行

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全国の小中高等学校が臨時休校となった昨年３月から１年が経ち、いよいよ今年度も終わりに近づきました。６月の学校再開後も一定の制約のなかでの学校生活が続きましたが、本校の子供たちは、学校生活を充実させようと、日々の学習や諸活動に熱心に取り組んできました。そして、やまびこまつりや大月市音楽発表会、各種スポーツ大会などが中止となった一年間だったからこそ、一人一人が自分自身の根を伸ばし、力を蓄えることができたと感じています。また、リモートでの児童生徒会総会や学部集会などを通して、人とつながることの大切さや言語以外のコミュニケーションの重要性などをだれもが再確認しました。

さて、そのような状況下でしたが、富士・東部教育事務所や各市村教育委員会をはじめとする多くの関係者の皆様の御理解と御協力に支えられ、今年度も東部地域の特別支援教育にかかわるセンター的機能の業務を円滑に遂行することができました。本号では地域支援にかかわる状況をお知らせします。

表１

	幼稚園保育所 幼児	小学校 小学生	中学校 中学生	高等学校 高校生	その他
教育相談･見学 授業体験	6	3 （うち体験１）	１０ （うち体験３）	0	１
訪問支援	0	３６	１５	１	0
研修支援	0	3	5	１	１（中止）

※オープンスクールは中止としました。

［１］教育相談・授業体験

今年度のスタートは６月の学校再開後となりました。各市村教育委員会･教育支援室や研修センター、小中学校と連携する中で、就学・進学にかかわる相談を受け入れました。進路決定時期の相談はもちろんですが、数年前から進路を考える段階での相談が増えています。差し出された進路先に進むのではなく、時間をかけて進路決定していくことが重要です。本人が揺れながら選択するというプロセスを踏むことによって、入学後の学校生活は大きく変わります。生徒・保護者が正しい情報を得、一人一人がよりよい学びの場を選択できるよう、次年度も相談や見学・授業体験などの機会を充実させていきます。

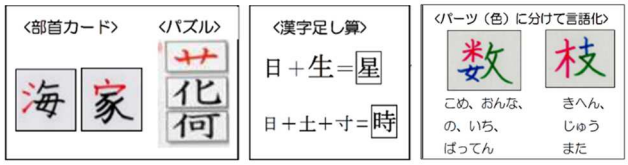
［２］訪問支援

小中学校の通常の学級には発達障害児が 6.5%在籍している可能性がある（文科省の調査・H24）と言われますが、支援要請のほとんどが発達障害、または発達のかたよりが疑われる児童生徒の指導支援に関わるものでした。ほとんどの小中学校では、視覚教材の利用や ICT 活用などを含むユニバーサルデザイン化を意識した授業が展開されています。学びやすさを感じている児童生徒も増えているようです。しかし、支援の対象となった児童生徒の場合、ユニバーサルデザインだけでは足りないため、個別の配慮「合理的配慮」の提供が必要になることは周知のとおりです。各校においては、特別支援教育コーディネーターや学級担任を中心に、本人・保護者と合意形成を図りながら、その提供の検討に努められています。

【コンサルテーションの中で話題になったことからⅠ】

UD 漢字の学び方は一つではない！

学び方を子供自身が身に付けられるよう幾つかの方法を用意しましょう。



＜部首の意味を知る＞
さんずい（氵）は、「水」に関する漢字だね。
「海、湖、泳、池」

＜絵で意味づけ＞
月

書き順
漢字練習
読みから

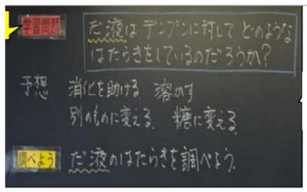
合配 板書を写す（書く）ことへの配慮［Ⅰ］

書くことにつまずいている場合、時間の確保も必要です

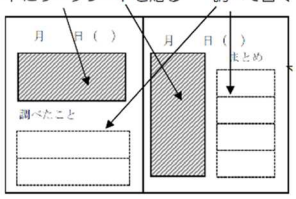
①板書内容を手元に

②板書をデジカメで撮る

③ワークシートで書く量の調整を



ノートにワークシートを貼る　調べて書く



UD 新出語句を知るための工夫を！

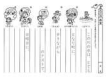
言葉での説明を聞いて理解できる子供がどのくらいいるでしょうか。知っているから聞いたときにイメージできるのです。言葉の学習を工夫してみましょう。
（教材文を読む前に言葉の学習を設定）

①国語辞典

②電子辞書

③図鑑や写真で

④短文づくり



⑤漢字から

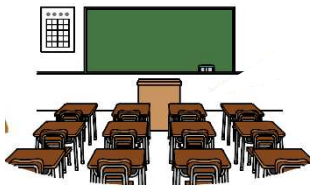
⑥文脈のなかで

⑦類義語・反対語

⑧動作化して

UD 使いやすいノートを選ぶ！

マス目の大きさ、補助線付・無し、罫線の太さ、方眼、縦書き・横書き・・・



合配
落ち着いて学習できる座席は？
子供を観ましょう！

【コンサルテーションの中で話題になったことからⅡ】

「図工の制作活動に全く参加できない児童がいます」

思いつく支援ではなく、「なぜ参加できないのか」目の前の子供を観ることが大切です。

例①何時間もかけて制作するような表現活動の場合

⇒　見通しをもつことが難しく不安を感じているかもしれません。

⇒　導入時は、１回の授業内に仕上がるミニ作品づくりと、その工程を用意してみましょう。

例②抽象的なテーマの場合

⇒　イメージすることが難しくて困っているかもしれません。

⇒　まずは、本人の興味ある題材から始め、制作に向かうことを優先してみましょう。

例③不器用で作ることに抵抗がある場合

⇒　これまでの失敗経験から、制作に向かうことが怖いのかもしれません。

⇒　いきなり道具を使った、複雑な工程ではなく、スモールステップで、「できた！」を実感させましょう。

例④集団の中で学習することが苦手な場合

⇒　小集団や個別学習場面を用意しましょう。

⇒　学習環境の調整も必要です。教師の声の大きさや言葉数、声のトーンなども環境の一部です。

★問題行動にばかり着目し、「どうにかする」ことだけを考えがちですが、子供たちは「学びたい」のです。何につまずき、学びづらさを感じているのか。子供の困り感に目を向けて支援しましょう。

【コンサルテーションの中で話題になったことからⅢ】

ICT を活用するからこそ板書はますます必要です

視覚的に提示することで、子供の視線は上がり、当然、話は聞きやすくなります。また、「百聞は一見に如かず」見ればわかることも多いです。しかし、提示したことで安心し、教師の一方的な説明が続いたり、提示画像が焦点化されておらず、どこを見ればいいかが分かりにくい。プレゼンスライドが次々と代わり、頭に残りにくい。このような場面はないでしょうか。

電子黒板やプロジェクターだけで授業を進めるのではなく、提示した資料などで、残すべき情報や、子供の気付きなどは板書として残すことが大切です。

＜ある小学生の声＞

「字が小さくて見づらい。」

「消えてしまうから問題を解くときに分からなくなる。」

（思考場面で立ち返るところがない。ということでしょう。）

本田秀夫先生は話されていました（2021.2.11 地域支援研修会にて）

「固有の文化を有する子供たちの居場所として、“特別な場”の用意が必要不可欠だ。」と。

そのことは、通級指導教室や自閉症情緒学級などにおける子供の姿からも、かかわる先生方は実感されていることでしょう。私たちが、コミュニティの創造という視点をもつことが大切なのでしょう。

［３］研修支援

小学校では、「情緒障害について」「子供理解（知能検査結果を含む）」、中学校では、校内研究会や校内支援委員会への出席の要請などがありました。また、高等学校では、「一人一人の個性に合った指導の工夫について」の校内研修会に協力しました。テーマの出発点が、校内支援委員会等における対象児童生徒の支援の方向性を探る過程だったり、授業のユニバーサルデザインを考えた上で必要になった個別の配

慮の視点からだったりしたことから、各校において特別支援教育が推進されていることを改めて感じました。

表出の少ない心因性の場合、内気な性格やわがままだと思われる等、発達障害の二次障害や情緒障害としての理解はされ難いこと。本人の生きづらさが気付かれにくいこと等を意識し、少しでも早い対応をしたいと、学校組織として取り組み始めている学校がありました。また、知能検査結果は数値だけをみてしまいやすいが、認知特性について学び、教育環境や指導上の工夫について考える機会を持とうと研修の機会を設けられた学校もありました。Ｋ校の校長先生は、「子供を知る（観る）目をもつことが支援を考える上で大切だ。」と話されました。

外部専門家の積極的な活用を進めています

本校には、心理士が月３回（12時間）、作業療法士が月１回（７時間）配置されています。その活用状況は表２のとおりです。また、校内基礎研修会（心理士、ＯＴ各１回）や事例研究会（心理士２回）、重複障害学級担任対象実技研修会（ＰＴ２回）も実施しました。校外支援については、心理士（１回）と言語聴覚士（１回）の帯同訪問を行いました。各小中高等学校においては、ＳＣ（スクールカウンセラー）の活用や専門機関との連携も進んでいるようですが、専門家の同行が必要な場合は御相談ください。

表２

	心理士①	心理士②	ＯＴ	ＰＴ	ＩＣＴ
小学部	1	2	3	2	1
中学部	2 保護者（2）	4	6	6	2
高等部	8	7	5	1	0
	年間 48 時間	年間 32 時間	年間 49 日	派遣３日	年間２回

※延べ件数ではなくケース数で表す　※高等部については、生徒自身の心理士面談も含む

【校内事例研究会より】

本校には、小中学校からの入学生が毎年います。特別支援学校という環境と教員の手厚さだけに甘んじることなく、「生活年齢と発達段階・認知特性を考慮した指導・支援の在り方」について振り返る機会を設けました。研究会には、心理士・松下浩之先生（山梨大学准教授）にも出席いただき、専門性のさらなる向上も目指しました。

1　引き継ぎが重要

「どんな配慮があると学びやすいのか」個別の指導や特別な配慮など、具体的に記録しておくことが引継ぎの際、役立ちます。また、引継ぎとは、今の段階を明確にすることは当然ですが、「どのような段階を踏んできて、今、どの段階なのか。これからどのように進んでいくのか。」という視点から引き継ぐことが大切であり、それが“支援の中身を引き継ぐ”ということになります。

2　子供の理解は限られた情報の中での解釈ではない

学習習慣や生活習慣など、どの子にもこれまで築き上げてきた習慣があるはずです。入学後、いきなり学校のルールに当てはめようとするから子供は混乱してしまうのです。子供がどのような環境で育ったのか、人も含めて環境をどのように捉えているか…等、一人一人異なります。できる限り情報を集め、的確なアセスメントを（生態学的な把握も含めて）行いましょう。

「これからの姿」に明確なビジョンを持つことが重要です！

【参考】専門家にできること

専門家のもつリハビリテーションの視点や心理学的な視点は、児童生徒の実態を捉え直したり、問題行動の背景や課題を整理したりするのに活かすことができます。また、支援の方向性の提案や自立活動の指導内容・方法の提案なども、支援・指導の改善を図る上で有益です。

理学療法士	作業療法士	心理士
・**環境における工夫を提案する** ＊環境とは、先生との関わりや物理的環境である。 ・**運動発達的な観点から運動の方法を提案する** ＊姿勢や運動を確認する。靴や机・椅子の適合性を検討する。 ・**各専門家と連携する** ・**学習会の開催**	・**子供の代弁者となる** ＊「なぜ、そのような行動をとるのか」 ・**運動を引き出す** ＊心や体が動きたくなるしかけを考える。 ・**感受していることを整理する** ＊子供と先生のやりとりを第三者として見る。 ・**学習会の開催**	・**教師と連携・協働して問題解決にあたる** （スーパービジョンとは異なります。） ・**行動コンサルテーション** ＊ABAやCBTの考え方や諸技能を活用して ・**生物心理社会モデルによるアセスメントとコンサルテーション** ・学習会の開催

左上　校内基礎研修会「子供理解と支援-ABA の視点から-」(対面・リモート実施)

右上　事例研究会「支援の評価と今後の課題－外部入学生を対象に－」

左下　実技研修会「子供の身体と向き合うために」

文責　辻

さつまいもほり

マリンバ鑑賞会

OTSUKITCHEN パンフレット配布

児童生徒会集会・全校ボッチャ大会

【お知らせ】

令和３年度もオープンスクールは実施しません。個別の教育相談・学校見学・授業体験を随時受け付けます。また、就学・進学にかかわる情報提供も行いますので、早めに御相談ください。

【問い合わせ】山梨県立やまびこ支援学校　〒409-0618　大月市猿橋町桂台３丁目31－1

TEL　0554-23-1943　FAX　0554-23-1946

E-mail　soudanshien@yamabikoy.kai.ed.jp　URL http://www.yamabikoy.kai.ed.jp/

相談支援担当：辻 松子、小林 由季　※月曜日（午前）、火曜日・木曜日（終日）

「かがやく笑顔」は、やまびこ支援学校の校訓です。本校の子ども達はもちろんのこと、保護者、職員、そして、地域の皆様も一緒に毎日かがやく笑顔で過ごしてほしいという願いが込められています。